令和4年度第1回郡上市市民協働活動審査会　要録

日時：令和４年６月28日（火）　13：00～14：55
場所：郡上市役所本庁舎　４階　大会議室
出席者：委員
　　笠野信男、武藤里恵、乾松幸、上村英二、青木修、三輪幸司
　事務局
　　三島政策推進課長、木嶋係長、牧野主任
欠席者：なし

1. 開会挨拶
（会長より挨拶）

2. 審査会進行・審査資料に関する説明
（事務局より進行、審査方法等について説明）

3. 魅力ある地域づくり補助金交付申請に関する審査
（進行を会長に交代）

①「魅力ある地域づくり推進事業　市民活動部門」
石徹白地区地域づくり協議会

担当者　　自己紹介と事業についての説明。
　石徹白地区は子どもたちが増えているが、子どもたちの学びの場づくりということで、子どもたちの放課後・休日の食育菜園活動として申請をした。
　内容は、石徹白の中で自分たちがやりたいことや、その地域の自然、コミュニティとの繋がりを、食を通じて体験させることで、地域の魅力を子どもたちの記憶、原体験として残したいからである。
　事業のスケジュールについて、夏に地域づくり協議会から借り入れている自宅の庭にガーデンを作って、そこで子どもたちに種をまいたり、ガーデン作りをしたり、野菜を収穫したり、地元の川の魚を調理したいと思う。また、地元の肉漬けという郷土料理があり、それを各家庭で作っているが、子どもたち自身で作ってみて、何故それが必要なのか、それがどのようにできているかを学べる場にする。
　今後の展望として、その体験の中で子どもたちが、自分たちが食べるもの、自分たちで育てて食べるということだけではなく、それをシェアすることや、今まで育った環境、その環境を整えてくれた親、おじいちゃんおばあちゃん、周りの村の人たちに感

謝を返していけるような活動に、来年度以降取り組めるようにと思っている。
事業効果は、一番に石徹白の地域にとって、この活動を通して、子どもたちと村の人たちとの交流を今年実現できたらと思っている。
長期的には、もともとの地域づくり協議会の目的である、小学校の存続だけでなく、石徹白集落自体が、魅力ある地域を担っていく、ふるさとに思われていくということが実現できたらと思っている。
補助金は、子どもたちが使う移植ゴテやバケツ、備品ではテーブルなど、原材料として、土や苗木、調味料や小麦粉などこの１年間で収穫できないものの購入に使用する。

質疑応答

委員①　食育菜園が目的か。

担当者　食育菜園はきっかけで、目的は、石徹白での放課後の時間だとか休日の時間が、魅力に感じるような体験を実現することである。

委員①　予算書を見る限りは食育菜園になっている。バケツとか移植ゴテは一人一人の子どもが持っていけば済むことではないか。食育菜園のために本来必要とすべきものを買うのが大事ではないか。

担当者　企画段階であり、各家庭がそれを持って行っていいものなのか、どれだけあるのかというのが分からない。他に回せることがあれば、それが一番よいと思う。

会長　放課後児童クラブは石徹白に作るという動きはないのか。

担当者　移住者の数が増えていて、両親が共働きだから、放課後にいられる場所はないかということで学校へ相談があって、学校の隣にある支援センターに、子どもを預かってくれるのを募集していたことが去年あったようだが、なかなかそこに子どもたちが遊びにくることがあまりないとは聞いている。

委員②　他の委員が言われたように、どれが本当に補助金として活用しなければいけないものか。３年間や更に３年過ぎた時にどうしていこうかというのを、今年度活動しながら、地域の皆さんの知恵を結集して、継続の方法をどう作っていくかということに頭を悩ませてもらえたらいいなと思う。

委員③　別の委員が言われた、残るものや大事なものに使っていくというのが、一つの手段ではないかと思う。

石徹白地区地域づくり協議会から 26 万という収入となっている。これは継続的に、地域づくり協議会としても、これぐらいは毎年負担していこうかという気なのか。それとも 3 年間だけにするのか、1 年目だけにする予定であるのか。

協議会事務局　今年は初年度なので、代表的なもので、実際ここの中に入ってない費用というのがかなりある。初年度で備品めいたものは初めには多いけれども、既に 2、3 年運用されている。費用は今年だけかかる感じになると思う。

委員①　石徹白の子どもたちにとって大事なのは、石徹白の中でいろんなものが循環をして石徹白が成り立っているということを感じさせてやることが大事である。もっと費用の使い方として、そちらの方に向けられたほうがいいのではないかと思う。バケツと移植ゴテの購入については、果たしてこれでいいかなという思いがあったので申し上げたい。

担当者　なぜその備品の購入にこだわるのかについては、家のものを持ってくるという行為と、自分たちが買ったものを大事に扱うという、体験として違ってくるというのを子どもたちに見て感じてもらうためである。必要なものは買っていくとか、これは買いたいとか、子どもたちと一緒に決めればいいかなと思っている。

委員④　石徹白では以前から移住者が多く、地域の方と一緒に取り組んでいる。移住者と地元とは文化や考えが違うことがある。地域の子たちの違和感とか摩擦が起こるのではないか、石徹白の姿勢はどのように心掛けているのかお聞かせいただきたい。

担当者　確かに、何か一緒にしたいということを子どもたちが企画して、ならばそれをどうしたらいいかということを、両親とか、いろんな人に相談したりしながら進めていくという中で、各家庭で異なることがたくさん出てくることはある。

しかし、違和感等がありつつも、それを含めて一緒に作っていくというスタンスは子どもたちから感じられる。いろんな意見がある中でも、一緒にやるとか、その違和感を受け止めたうえで、それを実現していくためにはどのようなやり方があるかという考える文化を大事にしたいと思う。

協議会事務局　今の子どもたちに土を触らせることはできにくいというのが現状である。学校の畑は存在するが、その物を育てる、その畑で物ができるかということに、どれだけ本当に子どもたちの心に残っているかというのは分からない。その中で、子どもたちも何人かで一緒にやれば、自らやるという気持ちは強くなる。それぞれの家庭の中で親と子どもの関係であったら行き着かないものが、もっと高揚して、子どもたちは自ら

考えるようになる。そのような場所を、ある程度大人が作らないと今は難しいのかなという意味で、今彼がしているところに効果はあると私は思う。

会長　　それでは質問は以上にする。
ありがとうございました。

②「魅力ある地域づくり推進事業　市民活動部門（スタートアップ助成型）」
しろうなぎ

事務局より事業説明。その後書類審査を行う。

委員①　　会員名簿を見ると、9 名中 4 名が市外在住でうち 3 名が都市圏である。郡上市に来て継続的な活動ができるのか。

委員①　　規約内に理事会があり、その理事会からの寄付を収入としてあげている。しろうなぎの理事会からしろうなぎの事業にお金を出すのはおかしいのではないか。

委員③　　会員名簿を見てどの役員、理事会の役員か分からない。

委員①　　今後の展望に「採取した種を利用して地域の養蜂家と地域資源を活かした商品開発」や「学校と連携した取組」とあるが、具体性がない。せめて事業後の 3 年間のスケジュールを出してほしい。

委員②　　そもそも何故ひまわりなのか。

③「魅力ある地域づくり推進事業　市民活動部門（スタートアップ助成型）」
高鷲中学校生徒会　地域担当部

事務局より事業説明。その後書類審査を行う。

委員③　　申請団体は学校運営協議会が申請団体になって、それで生徒会を活用しながら、この事業を行っていくという話なら分かるが、今は生徒会が申請者として申請し、1 年だけデザインすることになっている。スタートアップというとちょっと違うのではないかという気がする。申請団体が運営協議会のほうがスッキリするのでは。

委員①　事業効果の「高鷲地域の一体感づくりを進めることができる」とあるが、具体性がない。シャツを着ることで一体感を出すというのは根拠として弱い。場合によっては中学生を使った資金稼ぎになる恐れがある。ポロシャツを販売して資金を稼ごうという発想にならないようにしてほしい。また、中学生がどのように地域貢献できるのか明確にしてほしい。

4. 閉会